



予防接種ってなに？



人の体には、生まれながらにして細菌やウイルスから体を守るための「免疫」というシステムが備わっています。免疫は、免れること。疫は、疫病の疫、つまり病気のこと。免疫とは、病気から免れる、病気に罹らなくすることを意味します。

免疫には、自然免疫と獲得免疫があり、一度罹った感染症に罹りにくくなるのは、獲得免疫の効果です。人は、産まれてから成長する間に様々な感染症に罹ることによってその免疫を獲得し、だんだんと感染症に罹りにくい体を作られて行きます。

ところで、獲得免疫ができるためには、一度はその感染症に罹らなければなりません。乳幼児がよく熱を出すのは、初めての感染症に対して免疫を獲得するための通過儀礼とも考えられます。しかし、感染症の中には、日本脳炎のように発症すると死亡率が高く、生存しても重篤な後遺症が残るものも少なくありません。感染症に罹らずに免疫を獲得できれば、それに越したことはありません。

予防接種は、対象となる感染症のワクチンを接種することで、その感染症に罹ること無く、予防に有効な免疫を獲得することができま



予防接種の歴史

人類の歴史は、感染症との戦いの歴史と言っても過言ではありません。14世紀には黒死病と恐れられたペストが大流行し、世界人口が20%以上も減少したと言われています。17、18世紀のヨーロッパでは、天然痘が猛威を振るっており、約1世紀の間に六千万人ものが亡くなったそうです。天然痘は、感染力が非常に強く、致死率が20〜50%というとても恐ろしい感染症です。

18世紀の前半、イギリスの医師エドワード・ジェンナーは、「牛痘に罹った人は天然痘に罹らない」という農婦の話から、長年研究を重ね、ついに種痘を開発しました。種痘は、牛痘ウイルスを人に接種することで天然痘に対して免疫を持たせるという、世界で初めての予防接種法です。

牛痘は、牛だけで無く人やネコ科動物にも感染、発症します。牛痘ウイルスは天然痘ウイルスの近縁で、感染すると牛痘だけで無く天然痘の免疫も獲得することが出来ます。人の場合は、発病しても症状が軽く済み、癩痕も残りません。

ジェンナーによる種痘の開発後、世界的な撲滅運動がなされ、1980年にWHOにより天然痘の撲滅宣言が出されるに至りました。地球上から、天然痘という感染症が根絶されたのです。

社会貢献としての予防接種

予防接種の目的を尋ねたら、多くの方は、「自分が感染症に罹らないようにするために」と答えることでしょう。勿論、正しいのですが、予防接種には、他にも大きな目的があります。

予防接種の目的

- ① 個人の感染予防・重症化防止**
予防接種を受けることにより、感染症を予防したり、罹った場合に重症化し難くする効果が期待されます。
- ② 感染症の蔓延防止**
その地域や社会、国に感染症が侵入して行くことを防ぐ、或いは入ってきたても広く感染症が拡大、蔓延することを防ぐ。
- ③ 医療費の抑制**
感染症を防ぐ、或いは重症化を防ぐことにより、その治療にかかる医療費を抑制する。

感染症の蔓延を防止するためには、多くの人が予防接種を受けて集団免疫を強固にする必要があります。個人の予防接種が点の防衛だとすれば、集団免疫は、個人の点が集合した面の防衛と言えます。集団免疫が強固になると、ワクチンを打つても十分免疫がつかなかった人、打ちたいけれどアレルギーや免疫不全等で打てない人、ワクチンの接種時期前の赤ちゃん、免疫力の落ちた高齢者など、何らかの理由で予防接種を受けられない人たちも、集団免疫が盾となって感染症から守ることが出来ます。

かしまの女子的



井戸端会議

看護部 訪問診療課 阿部めぐみ

「大切なもの」

訪問診療では患者様との関わりだけでなく、その方の「家族」とも深く関わることが常です。どうしても人生の終盤に関わる

ことが多いため、避けては通れません。毎回いろいろな家族がいて、様々な家族の形があつて、まさに十人十色です。

そんな私はというと、4世代ひとつ屋根の下で生活しています。下は3歳から上は90歳まで幅広く、各ライフステージを日常でも見ることが出来ます。

核家族が主流の現代で、自分だけだけでなく子供たちにとっても貴重な経験をさせてもらっているなと思います。仕事に子育てとちよっぴり介護が混同する日々は決して楽なことではなく、支えて協力してくれる「家族」の存在がとても大きいです。

また一人の女性としても、妊娠・出産・育児を仕事しながら何度も経験出来たということはやはり家族の力があつてこそだと思います。

家族の存在は当たり前前に思うところがあり、改めて考えることはめったにないのに、今回「家族」というテーマでじっくり考えたとき、自分にとってやはり

「大切なもの」であると認識しました。生まれた時からの家族も、結婚して新しく築いた家族もかけがえのないものなのだと思います。

人が生まれ、老いていき、死を迎えるまでの過程を「家族」という身近なコミュニティを通してみることが出来る。そんなことは一昔前では当たり前のことでしたが、今ではとても貴重なことになってしまったように思います。最近よく耳にする地域包括ケアという言葉ですが、まずは家族というコミュニティから考えるものではないかと思えます。おひとり様も核家族も否定はしません。家族以上の絆で結ばれた関係を他の方と構築している方もいます。さまざまな家族の形があつてよいのだと思います。

親になつて初めてわかる親のありがたみや、離れて気づく兄弟への思いなどその時にはわからない家族への思い。これを読んだきっかけに自分の家族と向き合う時間を作ってみてはいかがでしょうか？

